研究の現場から

「ケアとモラロジー」研究会
――「共同研究」による「研究×教育」の試み

道徳科学研究所 副所長・教授
宗中正（そうなかまさ）

今年度、道徳科学研究所はプロジェクト体制に移行しましたが、初年度の活動を通して、そのよさは共同研究にあると感じています。複数のメンバーが一つのテーマに取り組むことで、①問題を多角的に捉えることで ②問題の本質を把握しやすく、その結果 ③発表者や参加者それぞれの視点から「自分ごと」として取り組むことができるからです。これは、自発性や実践性が特に必要な道徳の研究では、有効な方法だと思います。

今年四年目を迎える共同研究「ケアとモラロジー」は、広く共有されている「ケア」という視点から「人心開発救済」や「慈悲」について、またモラロジーの視点から「ケア」について考察することで今後の教育活動の発展に役立てようというもので、メンバー六名が「ケア」や「モラロジー」に関する考えを出し合いながら進めています。

モラロジーにおけるケアの本質

まず、ケアに関する研究の草分けであるミルトン・メイヤロフ氏の『ケアの本質』や、ケアとモラロジーの関係に早くから注目してこられた水野治太郎氏の『ケアの人間学』などを取り上げましたが、「同じ本を読んでも受け取り方は六人六様だな」と感じました。

その後、会を重ね、違いの背後にある考え方が見えてくると、そこからケアやモラロジーについての理解が深まり、それぞれの関心や特性、取り組むべき課題などが見えてきたように思います。私の場合は、これまで何となく違和感があったケアとモラロジーの関係について、「モラロジーにおけるケアの本質は、宇宙の働きのケア（天功を助ける）にある」という考えに至ったときに腑（ふ）に落ちたように感じました。

左から宮下、木下、宗、中地、竹内の各発表者

昨年九月のオンライン道徳科学研究フォーラム「ケアとモラロジー」でその成果を参加者と共有しましたが、これを単発の研究会に終わらせず、参加者との「共同研究」に発展させるために、フォーラムを参加者への「招待状」とし、希望する参加者と継続して研究活動を共有する試みを始めています。また、フォーラムの内容をブックレットにまとめ、広く共有する取り組みも始めています。

今後とも、研究と教育が一体となった「知徳一体の共同研究」のあり方を模索していきたいと考えています。